コロナ禍における教育のあり方について

ユナイテッド・ワールド・カレッジ ISAK ジャパン
代表理事　小林りん

コロナ禍を踏まえて、教育界には今大きな変化が３つ起こっていると考えます。
１）　オンライン教育
２）　非認知能力
３）　学びの個別最適化

１）　オンライン教育

コロナ禍で学校の休校が長引き、またいつ第二波、第三波がくるとも分からない状況が続く中、オンライン教育の重要性が再認識されていることは言うまでもありません。政府は、GIGA スクール構想で予定されていた生徒一人一台のデバイス配布を、予定よりも前倒しで今年度中に実施すると発表しています。

- ソフト面の充実：デバイスは配布しただけでは教育の充実に繋がりません。どういったソフトを導入し、どこまで双方向の授業などを推進するのか（３－６月の段階では、双方向でオンライン教育を行えた学校は全国でも５％に留まったと報じられています)。オンライン教育と教室での教育をどう整理するのか。根本的なビジョンの整理と実装が必要になるため、専門家も交えた議論が必要かと存じます。
- 教員のリテラシー：OECD の 2018 年の調査によれば、「教員の皆さんが IT デバイスを使いこなせていると自信を持って言える校長先生の割合」が、日本は、調査参加国 78 か国中、最下位でした。生徒にデバイスを配布するだけでなく、教員の皆さんの IT リテラシー研修、また学校現場や各ご家庭が必要とする各種テクニカルサポート提供などのために、人的にも財政的にも、支援が必要なのではないかと考えます。
- 格差拡大の防止：デバイスを配布しても、ご家庭によっては、WiFi などがない（親御さんの携帯電話が唯一のインターネット接続手段である）場合もあります。こうしたご家庭へは、今後緊急休校になった場合には自治体から接続環境を提供することも検討するべきかと存じます。

２）　非認知能力

今回のコロナ禍では、「３年後にくるはずだった未来が、３ヶ月で到来した」と言われています。こうした社会の急激な変化に対応できる大人になるために、学校教育が子どもたちに培ってもらうべき資質とは何でしょうか？

これまでも、知識偏重型の教育からの脱却、子ども一人一人の特長を活かした「生きる力」を育む重要性、クリエイティビティ（創造力）の大切さ、等は繰り返し議論されてきました。長野県として、今、具体的に何ができるでしょうか？細かな政策の積み重ねと言うよりは、抜本的な思想や発想の転換も含めて、改めて考えるタイミングに来ていると感じます。

３）　学びの個別最適化

実は、上述の１）と２）を併せて考える時に、欠かせない視点が、学びの個別最適化、だと考えます。

オンライン教育は、休校の時に学びを止めないと言う消極的な捉え方だけではなく、個々人の学びについてデータを蓄積し、生徒一人一人がどこでつまずいているのか、逆にどう言うことが得意なのかを把握する、これまでにない好機を提供してくれる手段であると、積極的に捉えるべきではないでしょうか。１）の議論を進める際に、ぜひこうしたデータ集約および活用方法についても、プライバシーに配慮しながら、しっかりとグランドデザインを描く必要があると考えます。

長野県だけでなく、日本ではどうしても、「全てが完全に平等でなければいけない」と言う考えが、学校現場や保護者の間でも、強くなりがちである印象を受けています（もちろんそうでない方も大勢いらっしゃるとは思いますが）。ただ、これからの時代、２）にあるように、知識の修得だけでなく、一人一人の個性や興味分野に即したプロジェクトに取り組んだり、研究やインターンに挑んだりすることが肝要だとするならば、全生徒が同時期に同じことを学ばなければいけない、と言う考え方にはある程度限界が生じると、私たちは覚悟するべきかも知れません。

オンライン教育の活用によって、もし一人一人の生徒の特長が掴みやすくなり、また、時間もある程度個別に創り出すことができるとするならば、その時間をどう使うかを生徒自らが考え、設計し、試行錯誤を繰り返しながらも実行していく。そんな取り組みが始まってもいいのではないかと考えます。